

# 日本ナシ ‘あきづき’ の整枝・せん定法改善による花芽着生の安定化

大沼欣生・池田裕章\*・鶴飼真澄・菊地秀喜  
(宮城県農業・園芸総合研究所・\*大河原地方振興事務所)

Stabilization of Flower Bud Formation by  
Improved Training and Pruning Method of Japanese Pear “Akizuki”  
Yoshio ONUMA, Hiroaki IKEDA\*, Masumi UKAI and Hideki KIKUCHI  
(Miyagi Agri. and Hort. Res. Center, \*Ogawara Region. Promo. Office)

## 1 はじめに

宮城県の日本ナシ栽培では、市場出荷される‘幸水’・‘豊水’を中心としながら直売や贈答など多様な販売方法に対応するため様々な品種が導入されている。高品質な日本ナシとして注目されている‘あきづき’についても近年導入が急増しているが、‘幸水’等で実施されている予備枝を活用した花芽着生技術をそのまま‘あきづき’に適用しても十分な花芽の着生が得られないことが報告されている。

そこで日本ナシ‘あきづき’の花芽着生を向上させる整枝・せん定法の検討を行ったので報告する。

## 2 試験方法

### (1) 予備枝長等の違いが花芽着生に及ぼす影響(試験①)

#### 1) 耕種概要

‘あきづき’6年生及び12年生樹。台木はヤマナシ台、樹形は2本主枝とした。

#### 2) 試験区

予備枝長は、30cm (A区) を対象とし、60cm (B区)、90cm (C区) 及び2段予備枝 (10~40cm 程度の長さの予備枝から発生した新梢を90cm 程度の長さにせん定し、もう1年予備枝として取り扱ったもの) (D区) の4段階に設定し、各区20~24本供試した。また、予備枝及び2段予備枝は、3月に棚面に対して約45度に誘引し、新梢の夏期誘引や芽かきは行わず、花芽が着生したものについては、全て摘蕾した。

#### 3) 調査項目

着生芽数、種類、枝長を落葉後に調査した。

### (2) 枝齢の違いが花芽着生に及ぼす影響(試験②)

#### 1) 耕種概要

‘あきづき’6年生及び12年生樹。台木はヤマナシ台、樹形は2本主枝とした。

#### 2) 試験区

図2のように、結果枝として利用した枝を枝齢別に新梢区、2年枝区、3年枝区の3区を設定し、5本供試した。棚付けは2年目に行った。

#### 3) 調査項目

着生芽数、種類、枝長を落葉後に調査した。

## 3 試験結果及び考察

### (1) 試験①

花芽率が最も高かったのは、D区の30.4%で特に予備枝(2年枝)部分の花芽率が38.3%と高く、新梢部分でも28.2%の花芽率となったが、予備枝(3年枝)部分では10.2%となり、枝齢によって花芽率に大きな差がみられた。C区では22.5%の花芽率となり、予備枝部分と新梢部分では花芽率に大きな違いはみられなかった。B区では17.5%となり、予備枝部分が新梢部分より高い花芽率を示した。対象のA区では3.5%と最も低い花芽率と

なり、ほとんど花芽が着生しないことが明らかとなった。

葉芽率については、A区の73.5%が最も高く、D区の27.2%が最も低くなり、いずれの区も新梢部分が予備枝部分より高い葉芽率となった。不発芽率は、D区の22.3%が最も高く特に予備枝(3年枝)部分で79%と非常に高い割合となった。新梢の伸びは、A区が121.5cmと最も長く、予備枝長が長くなるほど新梢の伸びが短くなり、D区で73.0cmと最も短くなった(第1表)。

試験①の結果から、予備枝長を長く設定するほど新梢及び予備枝とも花芽率が高くなり、2段予備枝とすることで、さらに花芽率が高くなると考えられた。着果基準を結果枝1mあたり5個と仮定すれば、予備枝長30cm及び60cmではそれぞれの枝長に対して十分な花芽数が確保できない。予備枝長90cmでは着生した花芽全てに着果させる必要があるが、2段予備枝では十分な花芽の着生が可能となる。しかし、2段予備枝では3年枝部分の不発芽率が極端に高くなり、2年間着果させずに育成する必要のあることから、結果枝として利用できる年数がごく限られると考えられるため、不発芽率が低く、新梢部分と予備枝部分で同程度の花芽率を示した予備枝長90cmが適当であると考えられた。

### (2) 試験②

花芽率は2年枝が39.3%と最も高く、次いで35.8%の新梢、20.3%の3年枝の順となった。葉芽率は新梢が35.8%と最も高く、2年枝が22.5%、3年枝が10.1%と枝齢が増すほど低くなった。また不発芽率は1年枝が14.8%、2年枝で32.6%、3年枝では57%と枝齢が増すほど高い不発芽率となった。

試験②の結果から枝齢が増すにつれて花芽率及び葉芽率が低くなり、不発芽率が高くなる傾向となったことから、結果枝の維持は困難と考えられ、枝齢3年以上の結果枝を多く配置することは生産性の低下や樹体の衰弱が懸念されるため、側枝の早めの更新や側枝を維持するための管理技術が必要になってくるものと考えられた。

## 4 まとめ

以上の結果より、‘あきづき’の花芽着生の安定化を図るための整枝・せん定法は、予備枝長を90cm程度とし、棚面に対して約45度に誘引して育成し、翌年結果枝として利用する方法が適当と考えられた。また、結果枝として2年程度利用した枝は早めに更新することが必要であると考えられた。

なお、気象条件や地域によっては十分な花芽が着生しないことがあるため、今後は夏季誘引の時期や方法等について検討する。

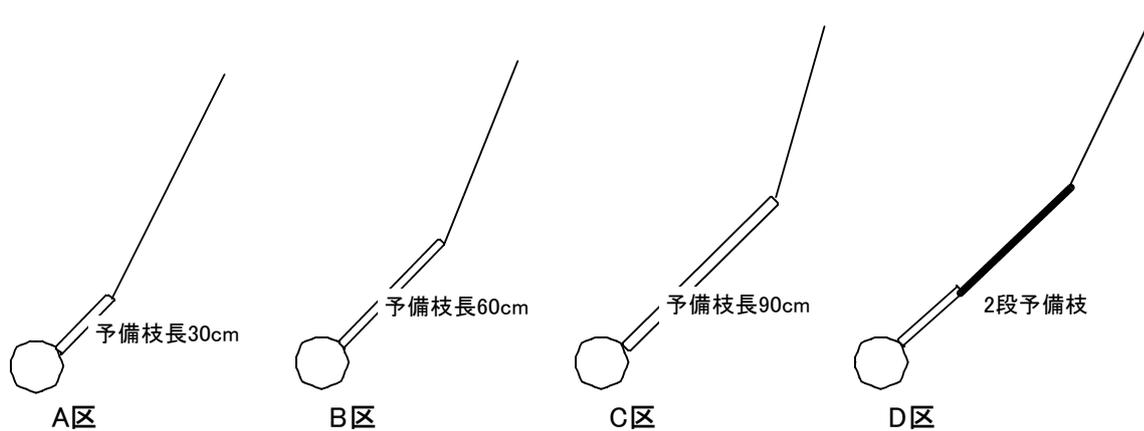


図1 予備枝長等の設定 (試験①)

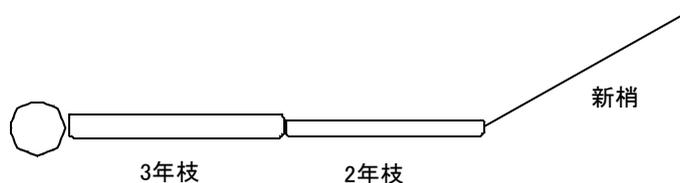


図2 枝齢の設定 (試験②)

第1表 予備枝長等の違いが花芽着生に及ぼす影響 (2007年)

試験区		総芽数(個)	花芽率(%)	葉芽率(%)	不発芽率(%)	枝長(cm)
A区 (30cm)	新梢	33.0	3.0	80.1	14.2	121.5
	予備枝部分	7.0	5.8	42.2	32.5	30.0
	計	40.0	3.5	73.5	17.4	151.5
B区 (60cm)	新梢	29.9	16.6	55.7	13.2	108.2
	予備枝部分	13.9	19.4	34.2	22.3	60.0
	計	43.8	17.5	48.9	16.1	168.2
C区 (90cm)	新梢	26.7	22.8	49.6	14.8	92.6
	予備枝部分	20.5	22.0	36.7	14.7	90.0
	計	47.2	22.5	44.0	14.7	182.6
D区 (2段予備枝)	新梢	23.0	28.2	40.0	12.1	73.0
	予備枝(2年枝)部分	23.0	38.3	20.8	16.5	90.2
	予備枝(3年枝)部分	6.5	10.2	5.1	79.0	22.9
	計	52.6	30.4	27.2	22.3	186.1

※花芽か葉芽かの判別が困難であった芽, 新梢となった芽の割合については省略している。

第2表 枝齢の違いが花芽着生に及ぼす影響 (2007年)

品種名	試験区	総芽数(個)	花芽率(%)	葉芽率(%)	不発芽率(%)	枝長(cm)
あきづき	新梢	16.2	35.8	35.8	14.8	47.2
	2年枝	17.8	39.3	22.5	32.6	55.8
	3年枝	15.8	20.3	10.1	57.0	52.8

※花芽か葉芽かの判別が困難であった芽, 新梢となった芽の割合については省略している。